オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2016 Summer Vol.03

Top Interview

ようこそ、最南西端の島々へ。

沖縄県立八重山病院 院長
依光たみ枝 先生

Take Free
ご自由にお持ちください

Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

島の人々の健康を守るためには

地域住民との“信頼関係”と地域医療機関との“連携”が必要不可欠です。

医療の本質と島の未来を見つめ続ける沖縄県の医師たちの

『ムルウチナー』を感じていただけたら幸いです。

2016 Summer

Vol.03

INDEX

P.02

Top Interview

ようこそ、最南西端の島々へ。

沖縄県立八重山病院
院長
依光たみ枝 先生

P.05

Hospital Review

沖縄県立八重山病院

P.06

OKINAWA Hospital Story

離島医療の今を支える

沖縄県立中部病院

#01 **見送る医師の話。**

沖縄県立中部病院
総合診療科 部長
本村和久 先生

#02 **羽ばたく医師の話。**

沖縄県立中部病院
初期研修医
富名腰朝史 先生

P.10

OKINAWA DOCTORS SCENE

沖縄で働く医師の話。

琉球大学医学部附属病院
手術部（麻酔科）
西　啓亨 先生

P.12

Muru Uchina Test

ムルウチナー検定

Top Interview

ようこそ、最南西端の島々へ。

2013年にオープンした新石垣空港から、勾配のあるさとうきび畑を抜けて市街地へ。八重山病院へ到着すると、受付で華やかなかりゆしウェアのスタッフとともに依光院長が迎えてくれた。2年後の移転に向け、日夜、若手ドクター確保に奔走している依光院長。今日は石垣島、そして、八重山諸島の医療の今について聞いてみよう。

INTERVIEW

沖縄県立八重山病院
院長

依光たみ枝 先生

Tamie Yorimitsu

沖縄県石垣市出身、熊本大学医学部卒業。沖縄県立中部病院で研修医時代から勤務し、麻酔科部長に。同病院のICU設置に貢献し、ICU室長や麻酔科指導医として活躍。同時に3児の母として、子育ても。2011年に沖縄県立八重山病院の副院長、2013年に院長に就任。

沖縄県立八重山病院
院長
依光たみ枝先生
Tamie Yorimitsu

島の変化を見守り続け 若き医師に未来を託す

「八重山諸島は当院がある石垣島を中心に、32の離島があります。そのうち、有人島は12島。沖縄本島、西表島に次いで、3番目に大きな島です」

故郷である石垣島に戻り、院長に就任して5年間、この島には多くの変化があったと語る依光院長。八重山諸島といえば、テレビドラマ「Dr・コトー診療所」のロケ地となった与那国島や、ハート型で通称「ハートアイランド」と呼ばれる黒島、星空観測で有名な波照間島など、観光地として全国的に名前が知られる離島が多く存在している。

「空と海の交通網の発達が、島に変化を起こしています。2013年に開港した新石垣空港により羽田空港から直通便も増便し、およそ3時間半に。また、台湾からのチャーター便、クルーズ船も増便が著しく、数年前まで年間約70万人と言われていた観光客数は、今や約110万人となりました。観光産業への影響だけでなく、島の医療も大きな変化のときを迎えたと言えるでしょう」

発熱やレジャー時の熱中症をはじめ、海でも陸でも事故が絶えないという。休暇を存分に楽しもうと規則を超えた時間をダイビングに費やしたために体調が悪くなってしまったり、レンタカーで慣れない地域を運転して衝突したり。救急室受診に占める旅行者の割合は11%から14%へと増加したと言う。

「観光客の入院も増えています。こうした八重山ならではの事情は事故だけではありません。いわゆる〝終末期医療〟にも、きっと多くの医師が向き合うことになります」

この地は終末期を迎えたがん患者が、癒しを求めてたどり着く場所としても知られている。その事情は様々で、到着後に不測のケースに陥ることも少なくないそうだ。

「八重山にたどり着いた途端に容態が急変したり、最期を目前にすると『故郷へ戻りたい』とおっしゃったりする方も多いんです。そういった場合は医師が付き添い、体調を見ながら故郷まで送り届けます」

八重山病院の医師数はおよそ48名。一人の医師が付き添いで数日間抜けるだけで、大きな負担となる。それでも、故郷の八重山に多くの人が訪れてくれるのはとても嬉しい、と依光院長は語る。

「このように、八重山には今しか見られない変化があります。急患ヘリ搬送も年間120件ほど発生していますし、ここは八重山唯一の分娩施設として年間600件ほどの出産も行われます。若手医師の力を、私たち病院のスタッフだけでなく、島に暮らす人々も、観光へ来る人々も必要としている地域なのです」

若手医師と一緒に昼食
「食堂の八重山そばはオススメです」
（依光院長）

Q. 八重山病院ってどんなところ？

A. ずばり、「日本最南西端に位置する中核病院」

「院内のすべてのスタッフとコミュニケーションを取り、活発な意見交換を行っています」（依光院長）

沖縄県立八重山病院
院長
依光たみ枝先生
Tamie Yorimitsu

ようこそ、最南西端の島々へ。

八重山で学び、暮らすということはまるで、家族が増えるよう

「緊急手術が365日24時間できるのは、八重山エリアでは当院だけ。総合診療科の立ち上げ準備中で、研修医が応募してくれるのを期待しています」と、最近の活気を喜んでいる依光院長。〝一人診療所〟となる離島勤務の前に、まずは、八重山で経験を積みたいという研修医も増えているそうだ。

「琉球大学の学生たちも、夏季休暇を利用して研修・見学へやってきます。離島の診療所を訪ね、島の方言や初めての在宅医療に戸惑いながらも、プライマリ・ケアを体感して笑顔で戻っていきますね」

小さな離島はもちろんだが、比較的大きな石垣島でも、島でしか起こらないようなできごとを体験できると言う。

「血液型によっては、輸血量がまかなえないことも。夜間は、ラジオなどですぐに島内に呼びかけます。そうすると、高校生や手術をする方のご友人などが一斉に集まってくれます。島民にとって、島全体が家族なのですね」

また、家族で赴任してきた医師の中には、〝近所付き合い〟を超え、島民がみな家族のような付き合いをしている地域性に感動して、移住を決めた人も少なくないとか。

「昨年の大きな被害を被った台風のとき、当院にも多数の避難者がいました。移住後初めて台風を経験する医師には、家族も一緒に病院へ来てもらっていました。私たちの大事なスタッフの家族も、私たちの家族のようなものですからね」

八重山病院の医師は3割が県立中部病院から、1割は琉球大学から、そのほかは県外から来ている医師で構成されている。

「いわば〝八重山合衆国〟のような、多様な医師の集まりで成り立っています。ここへ来てから、私もいろんな考え方があることに気づかされました。だからこそ、自由で臨機応変にサポートし合うことができていると感じます」

さらに、院長が女性であることからも言えるように、若手の女性医師がロールモデルとなる医師と出会える環境でもある。

「私も現役で医師を続けながら三人の娘を育てた身。若手でも、結婚・出産などのライフイベントは大切にしてほしいから、できる限りのサポートをしています」

移転後には院内に保育所を併設予定。子育てをしながらでも充実した医師人生を歩めるよう、準備したいと語る。

「移転後には、総合診療科を中心に研修医を独自に教育できるよう制度を整えたい、とスタッフみんなで意気込んでいます。これから、八重山諸島の医療は、ここ八重山病院から変えていきたい。どうか若手医師の皆さんの力をそこへ貸していただけたら嬉しいです。きっと、島らしい医療の姿を、存分に体感していただけると思います」

ここで働けば、家族のように大切にされると依光院長は胸を張る。「あたたかい人々に囲まれて暮らす」という人生を考えたいなら、まず、訪ねてみたい病院だ。

中部病院女性医師の集まり『女医な～ず』。依光家で開催された研修医歓迎会

総務課から贈られた誕生日ケーキを持って

Hospital Review

Okinawa Yaeyama Hospital

沖縄県立八重山病院

【 当院の理念・基本方針 】

八重山医療圏に科学的根拠に基づいた医療を提供します（4S）

- □ 1. 安全（Safety）　：「安全な医療」を提供します
- □ 2. 安心（Security）　：「安心でやすらぎのある環境」を提供します
- □ 3. サービス（Service）　：「患者中心のサービス」に努めます
- □ 4. 満足（Satisfaction）　：「満足の頂ける医療」を提供します

歴史を紐解くと、1949年八重山民政府立慈善病院として創設（10床）されたコンセットはわずか5ヶ月で全焼し、その後7回名称が変わり3回移転し、1980年に現在地に新築移転（175床）、1984年に西病棟が増築され、1986年に350床へ増床された。しかし築36年経った今の八重山病院では達成不十分な4Sの理念になってしまった。3年前の台風で病院建物は大打撃を受け、急遽新病院建築の計画が出て、2016年2月に旧空港跡地で着工式、2017年度完成を目標に現在急ピッチで工事が進められている。

【 課　　題 】

当院の特徴は、一言で言えば「日本最南西端の国境の中核病院」である。しかし、その達成には多くの課題を抱えている。最大の課題は医師を始めとする人材確保、離島ゆえのハンディに加え救急・周産期（八重山で唯一の分娩施設で約600件の分娩）・小児医療等の不採算部門の政策医療による経営・財政的問題、日常業務をこなしながらの年間120件発生する急患ヘリ搬送、新石垣空港開港後観光客の急増（年間110万人以上）に伴う様々な問題……達成困難な4Sに4Mで乗り切っていけたらと思うこの頃である。

- □ 1. 無理せずに：楽しく働ける職場で
- □ 2. 無視せずに：Fine Team workで
- □ 3. 無駄をなくし：病院経営へ参加し
- □ 4. 皆に信頼される病院をめざす

沖縄県立八重山病院

〒907-0022 沖縄県石垣市大川732　電話 0980-83-2525（代表）
http://www.hosp.pref.okinawa.jp/yaeyama/index.html

院長名	依光 たみ枝	設立年月日	1949年7月9日（民政府立慈善病院）
診療科目	内科、循環器内科、呼吸器内科、消化器内科、神経内科、腎臓内科、小児科、外科、呼吸器外科、消化器外科、精神科、泌尿器科、整形外科、産婦人科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科、リハビリテーション科、脳神経外科、麻酔科、放射線科、救急科　全23科		
医師数	48名	許可病床数	350床（稼働288床）
外来患者数	1日あたり423人	入院患者数	1日あたり216人

Voice

八重山病院で働く医師の声

小児科医師
熊坂泰磨 先生
Yasuma Kumasaka

写真は本人提供

社会に出て10年余り。
たびたび島を訪れては、
大自然と人のエネルギーに、
元気づけられてきました。

土地に力をもらい、
出来ることを土地に返す。
そういう生き方をしたいと、島に来ました。
妻と二人の娘を連れて。

仕事と生活が重なる暮らしです。

島の子どもの健康と生活に関わる。
その子を取りまく人々の生活に触れる。
同じフィールドに自分たちの生活もある。

甘くはありません。
でも頑張りたい。

子どもの元気な姿をみると、
満ちてくる。
子育ての喜びを分かちあうと、
満ちてくる。
家族で汗をかきながら思い切り遊ぶと、
満ちてくる。

私たちも、島のエネルギーを
繋いでいきたいです。

見送る医師の話。

INTERVIEW

沖縄県立中部病院
総合診療科 部長

本村和久先生

Kazuhisa Motomura

福岡県出身、山口大学医学部卒業。沖縄県立中部病院 プライマリケア医コースにて初期研修を受け、沖縄県立北部病院附属伊平屋診療所にて離島での研修を経験。沖縄県立宮古病院などを経て、現在、沖縄県立中部病院 総合診療科 部長に就任。

OKINAWA Hospital Story #01

離島医療の今を支える

沖縄県立中部病院

〝島医者〟は誰より島の人々が育ててくれる

「私は当院の『プライマリケア医コース』2期目の研修生でした」と言うのは、総合診療科・部長の本村先生。当時は後期研修1年目に離島へ赴任。1年間、一人で島の医療へ貢献することが決まっていた。

「どんなに努力しても、離島に行くのは不安がつきまとうもの。その反面、こんなに早く憧れていた島医者になれるのだという喜びもありました」

福岡出身、山口大学を卒業した本村先生がプライマリ・ケア医養成の名門だからと選んだ同院での研修。そして、すでに沖縄での暮らしが長くなった今〝最も充実した1年〟はやはり離島での研修期間だったと振り返る。

「研修地は沖縄最北端の離島・伊平屋島。天気がいいと与論島が見える、自然豊かな島です。次第に顔見知りが増え、急性期はもちろん、慢性期、そして、介護から最期を家族とともに看取るまでの時間を過ごし、かけがえのない瞬間が積み重なっていきました」

1年という短い期間だったが、自分の医療が島の医療として認識されていく実感を持てたと言う。

「離島での日々を今も鮮明に覚えています。島民と家族のように

島へ旅立ち
島に育ててもらえる
医師になれ

過ごし、あたたかい島の人々に育ててもらいました。この輝いた瞬間を、若手に伝えたい」

「プライマリケア医コース」の研修医たちへは、毎日が〝離島医療への準備〟となるような指導を心がけている。

「今のプログラムでは、後期研修3年目に離島に勤務することになります。当院ではとにかくベーシックな初期研修で、まずは基礎力を付ける。同時に急性期の患者さんをどんどん担当して離島での救急医療に備えてもらいます」

後期研修に入ると、骨折などの外傷、皮膚疾患、小児医療や産婦人科での経験など、離島で必ず役立つ知識や手技を中心に準備を続けていく。

「これでもかと急性期への対応を経験してもらうので、慢性期の患者さんとゆっくり接することができるのは、離島での経験が最初になるでしょう。つまり、島に育ててもらう。それこそが島医者の魅力なのです」

研修修了がスタート地点 先人たちに倣って羽ばたこう

「研修は準備であり、島医者のスタートは島に到着した日から。そして、島で医療に携わるうちに、先人の島医師たちの存在を感じられるでしょう」

1945年、沖縄戦終結後のこと。沖縄に残った医師数は、戦前の3分の1ほどとなる64名。感染症対策や母子保健など、住民の健康を保ちながら極度の医師不足をカバーするには「公衆衛生看護婦」や衛生兵や助手経験者であった「医介輔」の活躍があった。

「最後の医介輔が引退されたのは、そのおよそ60年後。ついこの前まで、歴史の中で培ってきた離島独自の医療が島民を支えていたのです」

この歴史の上に、自分たちが積み重ねていくべき医療がある、と本村先生は語る。

「今では、ドクターヘリで本島まで15分。夜間の場合は自衛隊のヘリを使用し、およそ2時間。当院で医師を育て、無医地区解消や救急医療の充実など、さらに良い環境を整備していきたい」

現在、自治医科大学の貢献もあり、沖縄は「無医地区の少ないランキング」で全国11位となった。そして、今年は中部病院の研修医が離島16島の医療をカバーしている。まさに、同院のプログラムが離島医療を支えつつあるのだ。

「赴任前の研修医には、離島とのテレビ会議に何度も参加してもらい、数年後の自分のイメージも作ってもらいます。なぜなら、離島では〝行かねばわからない〟ことばかり。離島で奮闘している医師たちの生の声を聞いてもらいながら、心の準備の一助にしてほしいですね」

いきいきしていた研修医が、離島へ行くと、より輝き出す。その姿が見られるのが指導医としての喜びだと語る本村先生。

「最近、研修期間である1年間の勤務後、そのまま島に残る医師も増えています。見送った側として、島の医療に魅了される人が増えていく喜びをかみしめています」

研修修了が、島医者のスタート。先人たちの尊い歴史の先に、最新の医療をつないでほしいと本村先生は言う。中部病院の研修医たちの活躍が、これから島をよりいきいきとさせていくのだろう。

本村先生と島の人々の交流風景

INTERVIEW

沖縄県立中部病院
初期研修医

富名腰朝史 先生

Tomofumi Funakoshi

沖縄県南城市（旧玉城村）出身、琉球大学医学部卒業。沖縄県立中部病院の「プライマリケア医コース」にて初期研修2年目。座右の銘は「曲なれば則ち全し」

羽ばたく医師の話。

OKINAWA Hospital Story #02

離島医療の今を支える

沖縄県立中部病院

島医者に憧れて医師となりこのコースに惚れ込んでいる

「現在、『プライマリケア医コース』の2年目です。このコースに自由選択の期間はあまりありませんが、離島診療所で必要な問診・フィジカルを優先して、徹底的に叩き込んでもらっています」

充実した日々を語りながらも、院内のPHSを片時も離さない富名腰先生。こうしている間にも、もし外科的な手術が始まれば、すぐに連絡が入る。離島診療所に行く前に積める経験を一つも逃したくないと言う。

「内科はもちろん、外科、産婦人科など一通りを、離島勤務が始まるまでの4年間で、一人で診られる力をつけなければならない。今は入院患者さんも担当していますから、早朝の採血から、夜まで容態の変化がないかずっと気になりますし、正直、休んでいる間ももったいない気がしているくらい」

富名腰先生がいわゆる〝島医者〟に興味を持ち始めたのは、中学生の頃。久米島に暮らす祖父がペースメーカーを付けることになったときだった。

「当時、まだ祖父は裸足で畑へ収穫に出かけていたような時代。ペースメーカーが必要だなんて、これから一体大丈夫なのだろう

離島医療で人生に彩りを

中部病院の廊下の壁に並ぶ、歴代研修医の写真

か…、島で暮らしていけるのか…と、幼いながらに心配でなりませんでした」

こうして、医師になろうと決意する前から、島の医療に興味を持った富名腰先生。大学時代から沖縄の離島医療に関する勉強会を開いたり、本村先生のもとを訪ねたり。当時、沖縄で唯一の「プライマリケア医コース」であり、指導医も離島診療所経験者が集まるとわかると、中部病院で研修を受けることは必然だった。

「このコースに惚れ込んでいます。島医者に興味があるなら、まずは見学だけでも来てもらえたら嬉しいですね」

十人十色の患者さんと彩り豊かな医師人生にしたい

「呼吸器のスペシャリストに手技を教わっていたとしても、世間話になると『離島診療所時代はね、診療所で赤ちゃんを取り上げたりもしたよ…。誕生の瞬間は感動するよ』なんて話が聞けたりします」

整形外科、精神科、救急科など、どの科も離島診療所の経験を持つ医師が多い。ベーシックな研修で基礎力を磨きながら、島でならどうするのかを同時に教わることができる、というメリットがこのプログラムに惚れ込んだ理由だ。

「離島勤務までに、体験談をたくさん聞かせてもらえることが、安心に繋がります」

そんな指導医たちとの日々のコミュニケーションが勉強になると富名腰先生は目を輝かせた。

中部病院の研修医は毎年およそ30名。その中で毎年4～6名程がこのコースを選ぶため、同期はもちろん、離島診療所帰りの先輩医師も院内に多く、縦・横のつながりを作ってから離島へ行けることも心強い、と語る。

「研修2年目になり、患者さんが十人十色、どんどん彩り豊かになるのが楽しみな毎日です」

今、感じているやりがいを富名腰先生はそう語る。最初は真っ白だった患者さんとの関係に、趣味や家族や仕事の話を聞いていくことで、まるで塗り絵のように様々な色が塗られていく。そして、それこそが医師人生の彩りだと感じているようだ。

「いろんな離島の診療所に見学へ行ったので、どこへ行ってもきっと楽しい暮らしだろうと想像しています。医師という役割を果たしに行くのではなくて、自分も色を持った一人の住民としてそこで暮らしたいと思っています」

青い海に青い空、カラフルな南国の花々。富名腰先生が赴任した島には、きっと、多くの色が加わっていき、島を彩っていくだろう。

Hospital Data

沖縄県立中部病院

〒904-2243
沖縄県うるま市宮里２８１
TEL：098-973-4111
http://www.hosp.pref.okinawa.jp/chubu/

院内のPHSを片時も離さない富名腰先生

カンファレンス風景

OKINAWA DOCTORS SCENE

沖縄で働く医師の話。

真そーけー（まくとう） なんくるないさ！
紺碧の海に癒されながら
子供を、若手医師を、育てていく

INTERVIEW

琉球大学医学部附属病院
手術部（麻酔科）

西　啓亨 先生

Hiroyuki Nishi

和歌山県出身、琉球大学医学部卒業。琉球大学医学部麻酔科学講座に入局し、初期研修開始。初期研修中には宮古島で在宅医療を研修した経験もある。那覇市立病院を経て、2009年から再び琉球大学医学部附属病院麻酔科へ、現在に至る。

麻酔科学サマーセミナー 集合写真

Hospital Data

琉球大学医学部附属病院

〒903-0215
沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
TEL：098-895-3331
http://www.hosp.u-ryukyu.ac.jp

なんくるないさー と奮闘した育児休業

「この保育園にはテレビなどの家電製品はもちろん、園庭によくある遊具もありません。沖縄らしい自然に囲まれ、木登りしたり、かけっこしたり、元気いっぱいな子供たちの姿を見て、娘もここにお願いしようと決めました」と琉球大学医学部附属病院、麻酔科の西先生。

今日は、半年間取得していた育児休業の最終日なのだと言う。

「和歌山で生まれ育ち、大学時代から沖縄へ。青い空と海に魅了されてここへ残りましたから、娘にも沖縄の自然の中でのびのび育ってほしいですね」

自然派志向の保育園に通うことは、紙おむつを使えないなど大変なこともあったが、西先生には刺激に満ちた日々だった。

「『家族のためならなんくるないさ!』と始めた育休でしたが、これまで仕事一筋だったので、初体験のことばかり。まさか、毎日布おむつの洗濯に追われるようになるとは…。でも、娘の成長をこれだけ近くで見られたことに、感動しきりでした」

麻酔科医として日中の多くの時間をオペ室で過ごしていたため、昼間の街の様子、保育園に通う子供たち、その両親、近所の方々などとの交流で、知らなかった世界を見ることができたと振り返る。

「きっかけは、同じ医師である妻が研究を継続するために産後8週間で復帰したこと。妻とのワイフワークバランスを、そして、育休を取得してからは自らのライフワークバランスを考える良い時間でした」

沖縄で医師を続ける理由ともなった、大自然や暮らしやすさも再認識。改めて、この地で医師として働く喜びを感じられたと言う。

「私たち麻酔科医は、どんなオペにも必要です。一人欠ければ、残る医師の負担は少なからず増えるもの。それでも、当院の麻酔科には男女問わず育休経験を持つ医師が多く、許諾をいただいた教授を含め皆さんの理解があって取得できたことに感謝しています」

仲間のありがたさも改めて感じたという西先生。その感謝を忘れず、復職後に恩返しできたらと張り切っていた。

子育ても、人育ても これからが本番!

「麻酔科医はオペになくてはならない役割。うまく麻酔をかけることができて、初めてオペができるわけですから、プレッシャーが大きい立場。まさに、縁の下の力持ちです」

乗客が眠っている間に、その命を預かり目的地へ届けるパイロットに例えられる麻酔科医。

「僕らは毎日手術を見ていますが、患者さんにとってみれば人生の一大事。悩み、緊張し、決心し、家族に見送られて手術室へいらっしゃるのです。手術中、コミュニケーションを育むことは難しいですが、何事もなかったかのように目覚めさせてあげたいですね」

徹底した全身管理に自信が持てるようになれば、必要とされている機会を多く感じられると言う。

「麻酔科を目指そうと思っていない研修医にとっても、呼吸・循環管理など、例えば緊急時に生命をどう維持するかが学べるいい機会を作れるでしょう」

沖縄の医療のためには、人育てもしていきたいと語る西先生。

「沖縄は南に開かれた研究・教育拠点です。ハワイ大学やラオスで毎年行われている口唇口蓋裂プロジェクトのチャリティーオペなど、学会も含め海外へもよく行かせていただきました。指導医の立場になってからは、ハワイ沖縄医学教育フェローシップを1年間受講し、国内の医学教育学会には学生と共に参加するなど、指導医としてもスキルアップに励んでいます」

育休からの復帰を目前に、これからが〝子育て本番〟〝人育て本番〟だと言う。また、育休を取得していた先輩医師として、アドバイスできることも増えただろう。

「私たちの仕事は、なんくるないさ、とはいかないときもあります。そのときは、『真そーけー(人として正しい行いをしていれば)なんくるないさ(自然とあるべき様になるものだ)』と唱えてオペに向かいます」

携帯電話からも、プレッシャーからも離れて、一人きりのリフレッシュタイムは海の底だと言う西先生。

「紺碧の海を孤高に泳ぐサメたちや、懸命に根を張り続ける珊瑚たちの強さを見て、自分も頑張らなければと思うひとときです。大学から沖縄に暮らし、ここから離れられないのは、沖縄の海、そして、大事な家族との暮らしが根付いたからですね」

一生暮らすと決めた沖縄。子供を育て、若手医師を育てていく、西先生の新たな人生のステップが始まろうとしていた。

ハワイでの医師教育フェローシップ

口唇口蓋裂手術プロジェクト(ラオスにて)

趣味のダイビング。沖縄に来てスキューバを始め、海外も含め、1,000本以上潜る

Muru Uchina Test

ムルウチナー検定

答え欄

Q.01 石垣・八重山の方言で「いらっしゃいませ」といえば？

A シミャーチ　B オーリトーリ　C メンソーレ

Q.02 沖縄県の「県花」といえば？

A ハイビスカス　B でいご　C ユリ

Q.03 沖縄といえば避けられない台風。過去最も多い1967年の発生数は？

A 39　B 28　C 45

Q.04 本島南部の東5kmにある「神の島」として有名な島は？

A 宮城島　B 浜比嘉島　C 久高島

Q.05 美ら海水族館で唯一名前をもつジンベイザメは？

A ベイス　B ケンタ　C ジンタ

Q.06 湧水を使った伊江島発の“告白飲料”といえば？

A オリソーダ　B イエソーダ　C シマソーダ

Q.07 朝の連続ドラマ「ちゅらさん」の舞台として知られる八重山諸島の島は？

A 石垣島　B 西表島　C 小浜島

Q.08 石垣島グルメ「ササミカツのおにぎり」と言えば？

A イリチー　B オニササ　C ジューシー

Q.09 石垣島から高速船で１時間、日本最南端にある診療所は？

A 西表西部診療所　B 波照間診療所　C 小浜診療所

Q.10 沖縄県の「医学教育フェローシッププログラム」で提携している大学は？

A ハワイ大学　B オーストラリア国立大学　C 国立台湾大学

正解が0〜3問 未来のうちなんちゅ

正解が4〜6問 THEうちなんちゅ

正解が7〜9問 スーパーうちなんちゅ

全問正解 ミラクルうちなんちゅ

答え

Q1.ボーリトーリ / Q2.ビでいご / Q3.A39 /Q4.C久高島 /Q5.Cジンタ
Q6.Bイエソーダ / Q7.C小浜島 /Q8.Bオニササ /Q9.B波照間診療所 /Q10.Aハワイ大学

Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

「MuruUchina（ムルウチナー）」第3号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。
沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。
この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。
ご意見・ご感想などお待ちしております。

発　行

沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215
沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
おきなわクリニカルシミュレーションセンター内
TEL：098-895-1225
E-Mail：r0000000@jim.u-ryukyu.ac.jp
※ゼロが7つ
http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp

ムルウチナー バックナンバー

vol.01

vol.02

編集制作

【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社

ディレクター・デザイン：勝又シゲカズ　文：さくまえり　撮影：小菅聡一郎

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン Muru Uchina ムルウチナー

2016 Summer Vol.03

沖縄県地域医療支援センター
Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
おきなわクリニカルシミュレーションセンター内
TEL：098-895-1225
E-Mail：r0000000@jim.u-ryukyu.ac.jp
※ゼロが7つ

http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp

沖縄県地域医療支援センター